「伊能図」完成から200年

伊能忠敬（いのうただたか）の全国測量

江戸時代、日本全国を測量して歩きわが国最初の実測日本地図をつくりあげた人物に、伊能忠敬（いのうただたか）（1745年～1818年）がいます。

忠敬が全国測量を始めた当時の天文学では、日食や月食がいつ起こるか予測できない問題があり、これを解決するには緯度1度の距離を測り地球の大きさを確定することが必要でした。

おりしも、蝦夷地（えぞち：現在の北海道）近海にロシア船がたびたび来航するようになり、幕府は国防のために正確な地図が必要と考えていました。

忠敬の師匠の高橋至時（よしとき）は、地図作りをしながら同時に各地の緯度を調べ、緯度1度の距離を算定しようと考え、蝦夷地までの測量と地図作りを幕府に願い出ました。その担当者として推薦したのが弟子の忠敬で、全国測量の始まりとなりました。

令和3年（2021年）は、伊能図の完成から200年目にあたります。

忠敬が作成した日本地図は、総称して「伊能図」と言われています。

『大日本沿海輿地全図』（だいにほんえんかいよちぜんず）は、江戸時代後期、忠敬が中心となって寛政12年（1800年）から足掛け17年にわたる測量により作成された日本全土の地図です。

大図（3万6千分の1）214枚、中図（21万6千分の1）8枚、小図（43万2千分の1）3枚で構成され、忠敬の没後、文政4年（1821年）に完成し、幕府に上呈されました。

伊能図には、名勝地を描いた特別図などさまざまな種類があります。

伊能図は江戸時代に作成された地図ですが、明治維新後も近代測量による地図が整備されるまで、国家の地図の作成に利用されました。

令和3年（2021年）は、伊能図の完成から200年目にあたります。

伊能忠敬像　（江東区富岡　富岡八幡宮）

伊能忠敬は、寛政12年閏4月19日（1800年6月11日）の早朝に富岡八幡宮（とみおかはちまんぐう）に参拝して第1次測量となる暇夷地（北海道）へ出発しました。その後も遠方に出かける第8次測量まで毎回富岡八幡宮で参拝し、無事を祈念しました。

この像は測量開始200年にあたる平成13年（2000年）に富岡八幡宮に建立されました。